

## 『雪中苗代のこと』

### 一 はじめに

戦後、稲作地図を大きく塗り替えた保温「折衷」苗代と言う言葉がありますが、若い方でこの言葉を聞いた方はどの位いるでしょうか。機械植えが主流の今、初めてという方がほとんどではないでしょうか。また、年配の方はなつかしいと思出した方もいるのではないのでしょうか。

私がこの言葉初めて聞いたのは、今からおおよそ35年以上も前の学生の頃、NHKラジオの農業関係の番組でした。

### 二 大いなる勘違い

ところで、小学校の頃の「キシヤがキシヤでキシヤした。」という言葉覚えていらつしやるでしょうか。「記者が汽車で帰社した。」というのが答えではなかったかと記憶しております。

私は「セッチュウ」と聞いて、てっきり早く苗を作るということで、雪がまだ消えないうちの「雪中」苗代と思込んでいたのです。「雪中」が「折衷」であると判ったのはしば

らくたってからのことでした。

### 三 保温「折衷」苗代とは

保温折衷苗代は、長野県軽井沢の篤農家と研究者の協力で開発されました。

発明者である萩原豊次氏は長野県軽井沢古宿の生まれで、当地は標高千メートルに近い寒冷地であります。たまたま、昭和6年の冷害の年に、ひどい被害を受けた中で、被害程度の軽い稲を見つけました。そこで、その農家に栽培方法を教わったところ、結論は早く田植えをする（早く初を蒔く）ということでした。

しかし、春の遅い寒冷地では具体的にどうしたらよいのか解らない中、昭和9年の春、野菜の苗を作っている温床（稲藁等で床を囲い、その中に醗酵熱を利用するために堆肥を入れ、その上に床土を入れるとともに、油紙で覆って保温する）の稲藁から落ちた初から発芽した稲の苗があり、試しに本田に植えたところ、その年に冷害が襲ってきたにもかかわらず、この稲だけは平年作の出来でありました。

### 四 県の試験場との協同

これまでの結果から、早く苗を作るためには、油紙で保温すればいい

ことは解りましたが、本当の困難はこれからで、具体的に油紙をどのように稲の苗代に使ったらよいのか解らず、壁に突き当たったのです。

このときに登場するのが県の試験場で働いていた岡村氏です。この2人の出会いにより研究者と生産者による協同研究が始まりました。試行錯誤の末、11年の歳月を費やしてついに昭和17年、油紙保温「折衷」苗代技術の完成を見るに至ったのです。

### 五 発見・気づきは現場から

今、本県は戦後営々と先達が造成した森林が、次々と大きくなってきており、間伐が喫緊の課題となっております。

間伐を効率的に実施する場合に、高性能林業機械を効果的に使うためのキーワードが、列状間伐と並んで崩れない路網整備であります。

現在、四万十式作業道がもてはやされておりますが、これは、大阪の指導林家である大橋氏が現場での気づきから体系化した「大橋式」作業道がルーツであります。これが九州の宮崎森林管理署や四国の高知県などに導入され、そこで創意工夫が加えられ、「宮崎式」、「四万十式」などへと進化し続けております。岩手

大学でも演習林に導入し、調査研究改良を重ねております。

### 六 生産性は気づきから

素材生産は、選木、伐倒、造材・枝払い、集材、運材等の一連の要素の組み合わせで構成されます。それぞれの要素を効率的に行うために、意識していることが肝要です。ムダを省くために、「何か」できることはいないかと常日頃思っていると、ある日突然女神が微笑みかけてきて、アイデアが浮かぶのではないのでしょうか。実効性のある技術は、現場から生まれるものと思っております。

### 七 おわりに

何か改善できるところはないかと思っている皆さんの所に女神が微笑むことを願っております。

なお、四万十式のルーツである「大橋式」作業道については、林業普及双書「急傾斜地の路網マニュアル」に詳しく説明があるので、ご参照下さい。

最後に、何故「折衷」と言うのかについては、お近くの農業普及指導員に尋ねてみて下さい。

林業技術センター研修部

小林 光憲